

## 「葉っぱのおもしろさを発見しよう」 植物図譜の描画手法を用いたワークショップの実践報告

A Practice Report on the Workshop “Discovering the Fascination of Leaves”:  
Using Drawing Techniques from Illustrated Plant Guides

Sunao Horikawa 堀川 すなお

### 要旨

本稿は、2025年7月21日に広島市植物公園で実施した「ひろしま木育アカデミー2025」第2回の一日型プログラム内で行った、描画ワークショップ「葉っぱのおもしろさを発見しよう」の実践報告である。当該プログラムは、午前に森林・木材に関する講義および園内での樹木観察、午後に葉を観察して描く描画ワークショップと、一日の振り返りディスカッションを実施するという構成であった。描画ワークショップでは、絵に不慣れな参加者にも取り組みやすいよう植物図譜の手法を参照し、葉の輪郭、葉縁、葉脈などの形態的特徴に観察の焦点を絞った。また、実物大と拡大図を併記すること、背景を省くこと、合理的に描画を省略すること等の描画ルールを参加者と共有し、植物図譜の観察と線描による記録を促した。午前の講義・観察で得た森林に関する知識や経験が、午後の描画実践における葉の細部への注意を促し、探究心の喚起に接続した可能性が示唆された。

### 1 背景・目的

本稿は、「ひろしま木育アカデミー」の連続講座の一環として実施した、「葉っぱのおもしろさを発見しよう」と題する描画ワークショップの実践報告である。同アカデミーは、広島県民の森林・木材への理解を深める

とともに、木との豊かな関わりを主体的に考えられる心を育むことを目的として活動している<sup>1</sup>。本ワークショップは、全9回からなるプログラムの第2回「知っている？森林と樹木のこと」において、2025年7月21日に広島市植物公園で実施された一日型学習プログラム内の企画である（図1）。講義、植物園散策、ワークショップ、ディスカッションを通して、広島県の森林について理解を深めることを目的とする。午前中は、広島県の森林や木材の特徴、主な用途、森林管理の現状と必要性に関する講義があり、その後、植物園内の樹木について解説を受けながら園内の散策を行った。自然の中における植物の組み合わせを園内で実際に観察することで、樹木一本の佇まいだけでなく、それらが集まって形づくる森全体の景観を捉える視点を得る機会とした。午後は、肉眼およびマイクロスコープを用いて数種類の針葉樹の葉を詳細に観察し、描画するワークショップを行った。葉脈の構造や形態的特徴を線で捉え、描くことを通して、普段は見過ごしがちな葉の形や構造の面白さを参加者が発見することを目的とした（表1）。以上のように、当日のプログラムは、①広島県の森林に関する講義（知識のインプット）、②園内での樹木観察（五感的体験）、③葉の描画（能動的な観察と記録）、④ディスカッション（気づきの言語化と共有）の4活動からなり、参加者が多角的に地域の自然と関わることができる構成となっていた。



図1 「ひろしま木育アカデミー2025」は全9回からなるプログラムである

本稿では、このうち筆者が担当した描画ワークショップに焦点を当てる。当日の参加者は対面13名、オンライン2名の計15名であり、20代から80歳以上まで年齢や背景は多様であった。参加者の多くは日常的に絵を描き慣れておらず、「描くこと」に苦手意識を抱く者も少なくなかった。そこで本実践では、一般に美術教育でスケッチとして想定される写実的描画（観察した対象を陰影や質感も含めて立体的に再現しようとする描き方）とは異なる描画方法を採用した。写実的描画では、三次元の対象を二次元に転写する過程で形態の歪みが生じやすいことに加え、陰影・質感・空間の把握など複数の要素を同時に扱うことが求められる。そのため描画者にとっては、どこに着目し、どの要素を優先して描けばよいかの判断が難しく、結果として「描けなさ」を招いて苦手意識につながりやすい。本実践では植物図譜の手法を参照し、葉の輪郭および葉脈の形状を線描で捉えることに焦点を絞った。これにより、何に注目して描けばよいかを明確化し、描くことに苦手意識をもつ参加者であっても、描画を通して葉の形を積極的に探究し関心を深められるよう工夫した。

時間	タイトル
10:30-10:40 (10分)	あいさつ、概要説明
10:40-11:00 (20分)	広島県の森林
11:00-11:10 (10分)	木材の特性と利用
11:10-11:50 (40分)	木製品に使われている樹木を知ろうー解説ー
(50分)	
12:40-13:55 (75分)	木製品に使われている樹木を知ろうー園内の樹木の観察ー
(10分)	
14:05-15:20 (75分)	葉っぱのおもしろさを発見しよう ★本報告
(10分)	
15:30-16:15 (45分)	今日の内容を振り返ろう
16:15-16:30 (15分)	おわりに

表1 ひろしま木育アカデミー2025 第2回「知っている？森林と樹木のここと」プログラム内容

## 2 「葉っぱの面白さを発見しよう」の実施内容

まず構成として、はじめに植物図譜の描き方を説明し、その後実践に移行した。描画に先立ち、参加者には以下の三点について、具体的な描き方のガイダンスを行った。一つ目に、植物図譜と絵画に描かれた花の植物表現の違いを示し、植物図譜では描かれた植物がどの種であるかが判別できることを重視する点を説明した。続いて、いくつかの葉のサンプルを例に挙げ、葉を観察するポイントを提示した。具体的には、葉全体の形、葉縁のパターン、葉脈の走り方、先端や基部の形など、複数の注目箇所を示し、葉の形の多様性や面白さへの気づきを促した。この説明では、葉の形へ親しみをもって観察できるよう、専門用語に偏らず、形と連動した言葉を用いるよう工夫した。例えば、鋸歯（きょし）状を「ギザギザ」と表現することで、理解と描きやすさを高めた（図2）。

二つ目に、描画のルールとして、植物図譜を描く際の基本的な約束事を三点共有した。まず、対象を実物大で描き、植物の大きさを正確に記録することを示した。全体図は原則として実物大（原寸）とし、肉眼では確認しにくい葉脈や葉縁などの微細な構造については、拡大した部分図を同一画面に添えることで特徴を明確に伝えられることを説明した。次に、背景や影は描かず、対象のみを描くことを示した。これにより描画者・鑑賞者共に注意を植物そのものに集中させ、形態の特徴を際立たせられる。最後に、合理的な省略を用いることを示した。例えば、左右対称や同形の線り

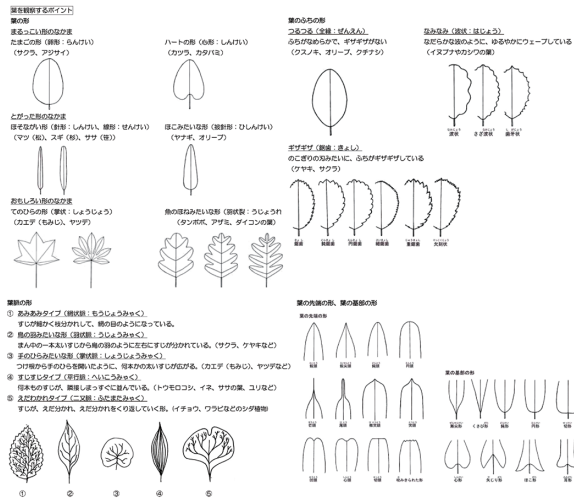


図2 参加者に配布した資料の一部抜粋。「葉の形」「葉のふちの形」「葉の先端の形」「葉の基部の形」に用いたイラストは『神奈川県広葉樹実生図鑑』（神奈川県自然環境保全センター、2011）から引用し、「葉脈の形」は筆者作図。



図3 参加者に配布した資料の一部抜粋（葉の描画は筆者作図）

返しがある場合、すべてを描き込む必要はなく、一側のみを詳細に描き反対側は輪郭線にとどめても、鑑賞者は省略された形を補完できる。あわせてこの手法は、限られた時間内で要点を効率的に伝える描き方である点も説明した。これらのルールは、事前に参考作品を用いて具体例を示しながら共有した<sup>2</sup>。

三つ目に、道具の選び方について説明した。今回は太さの異なる二種類のペン（0.5mm、0.03mm）を用意し、参加者が線の太さを自由に選択できるようにした。線画により、植物の種の特徴を描き分けるといふ植物図譜の基礎的要素に加え、二種類の線の太さにより、美術的表現の要素を取り入れた。ここでいう美術的表現とは、線の使い分けによって制作者が対象をどのように捉えたかを記録することである。例えば、特に印象に残った部分は太線で力強く、詳細に観察した箇所は細線で緻密に描くなど、線の強弱が制作者のまなざしの記録となることを伝えた（図3）。さらに、それぞれの葉がもつ形の規則だけでなく、目の前の葉そ



図4 葉を観察し描いているようす



図5 成果物の一例。モデルとなった葉（右）とその描画（左）。参加者は作品とモチーフとなった葉を熱フィルムでラミネート加工し、しおりとして持ち帰った。

のものもつ虫食い跡や欠損など、個体差も含めて観察し、対象を積極的によく見ることを促した。

以上のように、描画前に「葉の観察ポイント」「植物図譜の描き方」「個体の特徴の観察」を示すことで、参加者が描画のための着目点を理解し、安心して葉の描画に取り組めるような流れを作った（図4）。ワークショップの成果として、参加者は各自1点の葉の描画を制作し、計13点の作品が得られた（図5）。

### 3 考察・まとめ

本ワークショップの成果は単体の活動としてではなく、一日型プログラム全体の文脈の中で捉える必要がある。すなわち、午前中に実施した森林に関する講義および植物園ガイドを通して得られた、樹木全体を捉える視点や五感を介した経験が、午後の描画活動において葉の細部へと注意を向けさせ、参加者の探究心・

関心を喚起した可能性がある。また、「絵を描く」という行為を植物図譜の手法に限定し、観察の焦点を葉の輪郭や葉脈の形状といった形態的特徴に絞り込んだことにより、参加者にとって注目点が明確になった。その結果、参加者は対象と探究的に向き合い、葉の特徴を具体的な記録として定着させることに集中できたと考えられる。

## 4 今後の展望

今後は、植物図譜の描き方に限らず、美術以外の領域で培われてきた観察・描画の手法を調査し、ワークショップだけではなく筆者自身の制作にも応用することで、「ものを観察し、描く」という絵を描く行為の基礎的要素がもつ可能性を探りたい。また、本プログラムのように、専門性の異なる複数の講師が協働し、一つのテーマを多角的に探究する学習形態は、参加者に豊かな学びをもたらす可能性を秘めている。筆者自身も講師として本プログラムに参加できたことは非常に有意義であった。今後もこのような学外連携に積極的に参加したい。

### 謝辞

本ワークショップの実施にあたり、貴重な機会を賜りました「ひろしま木育アカデミー 2025」（主催：木育普及委員会）の主催者である木村彰孝先生（広島大学大学院人間社会科学研究所・教育学部 技術情報教育学・木材加工）に、深く感謝申し上げます。また、会場をご提供いただくとともに植物に関する知見をご教示くださった広島市植物公園の久保晴盛様に御礼申し上げます。さらに、本プログラムを支援いただいた令和7年度ひろしまの森づくり事業・特認事業に謝意を表します。最後に、本プログラムに参加し、貴重な作品ならびにご意見をお寄せくださった受講者の皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

### 【註】

- 1 「ひろしま木育アカデミー」は、木育普及委員会（2018年設立）が、木や森に関わる団体・教育機関・企業等の連携を促し、木育の普及・啓発を目的に実施する取組である。木育イベントの開催、木育プログラムの開発とエビデンス蓄積、3DVR・木製玩具・教材等のツール貸出、専門家による助言・コーディネート等を行う。（木育普及委員会ウェブサイト参照、最終アクセス 2025年12月18日、<https://mokuiku-hiroshima.studio.site/profile>）
- 2 「全体図は実物大、細部は拡大図とする」例として、チャルメラソウ全形と部分図（牧野富太郎『牧野植物学全集 第1巻（日本植物図説集）』昭和9年、国立国会図書館デジタルコレクション、最終アクセス 2025年4月1日、<https://dl.ndl.go.jp/pid/1236273/1/229>）を使用した。「合理的な省略」については、盛口満『植物の描き方—自然観察の技法Ⅲ』東京大学出版会、2015、p.97、p.154に記載のアカガシとオオシマコバンノキを提示した。